



国道398号を北西に進むと、湖と山並みが広がる雄大な景色が、訪れた人を出迎えてくれます。
今回は、豊かな自然に囲まれた花山地区の魅力を紹介していきます。



【特集】花山いいとこ巡り

歴史を刻む寒湯番所

花山湖を抜け、秋田県へ向かって山間を進んでいくと、大きくて立派な門が見えてきます。約400年以上前からこの地で花山と秋田を往来する人々を見守ってきた、仙台藩花山村寒湯番所跡です。
寒湯番所は、奥羽山脈方面12力所の番所の一つで、秋田藩雄勝郡に通じる花山越えの秋田口の関所でした。このように、他藩との境に設けられた関所を境目番所と称し、かつては「仙台藩仙北御境目寒湯番所」と呼ばれていました。
境目番所となったのは、伊達政宗公が岩出山入りした後の慶長年代からで、以来、200年余りの間、仙台藩と秋田藩を往来する人と荷物の検問を行っていました。
屋根がかやぶきの表門は、くぎを使わず、くさび止めした総ケヤキ造りとなっています。現在は、国道が番所跡敷地の外を通っていますが、藩政時代は街道を遮って、表門を構えていました。正面には検断所があり、関所守が常駐して関所手形を検査していました。
その奥には、桁行23・19メートル、梁行11・86メートルの

花山ってどんなところ？

花山地区は、市の北西部、秋田県との県境に位置します。国有林が面積の大半を占め、人口は令和4年3月末時点で915人。旧栗原郡では、郡内唯一の村でした。
特産物は、自然薯やイワナ、ソバ、シイタケなどのキノコ類が名物で、それらを取り扱う産地直売所や飲食店があります。

自然豊かな花山には、多くの動植物が生息しています。特に代表的なのが、「花山」の由来という説もあるアズマシャクナゲです。花山地区はアズマシャクナゲの自生北限地帯で、その学術的価値から1961(昭和36)年に国の天然記念物に指定されています。



▲5月下旬から見頃を迎えるアズマシャクナゲ

生活を守る花山湖

花山を象徴するものの一つが、町の中心にある花山湖です。ここは、自然にできたものではなく、花山ダム建設によってできた人工湖です。周囲は11キロメートルあります。花山ダム建設計画は、1947(昭和22)年のカスリーン台風による水害などを受け、迫川の水量調整や下流穀倉地帯のかんがい用水確保のため宮城県が進めたものです。

民家や農地、役場、学校などが位置する村の中心部がダム湖の範囲ということで、当時の花山村民からは反対の声が多く挙がりました。
旧花山村と宮城県は、幾度も交渉を重ね、迫川下流地域の人命と財産を守るために、1955(昭和30)年6月、交渉が妥結。1958(昭和33)年1月31日、花山ダムは竣工しました。

花山ダムの総貯水容量は3660万立方メートルで、東京ドーム約29杯分に相当します。その貯水能力は、竣工当時には日本一ともいわれていました。花山湖とダムは、水害を防ぎ、農作物を育む豊かな水をもたらすことで、私たちの生活を守っています。

大規模な二階建て住宅があります。この役宅は、関所守の居室でした。



寒湯番所の規模には変遷があり、現存する表門と役宅は、それぞれ1855(安政2)年と1857(安政4)年の建造といわれています。検断所は、現在建物が無く、基壇のみ残っています。

花山と生きる寒湯番所

藩政が終わり、役宅は大正時代の末頃には無人となりました。その後、発電所工事や製材所設置工事、炭焼きの作業員が宿泊所として利用していました。長い年月雨風にさらされたことで、壁や床は



朽ちて土台は傾き、野生動物がすみ付くほどになりました。そこで、旧花山村では、寒湯番所跡の保護に努めました。関所遺構として残存するのは、全国的にも極めて貴重と認められ、1956(昭和31)年9月に県の指定文化財、1963(昭和38)年9月には、国の史跡になりました。

寒湯番所跡は、その周辺と県境付近にある温泉を訪れる観光客が立ち寄りたり、道路標識に番所跡を模したイラストが使われるなど、花山を代表する名所となっています。

参考資料：花山村「花山村史 増補版 宮城県ウェブサイ」
文化庁「文化遺産オンライン」